

なぜいま
「仏教」
なのか

現代仏教のゆくえ

奈良康明

山崎龍明

なぜいま
「仏教」
なのか

余見世變
始知明

著者紹介

奈良康明（なら・こうめい）

1929年千葉県生まれ。東京大学大学院、カルカット大学大学院博士課程修了。文学博士。駒澤大学名誉教授（元学長、総長）。(財)東方研究会常務理事。曹洞宗法清寺前住職。著書に『仏教と人間』（東京書籍、1993）、『ブツダの詩』（日本放送出版協会、2009）、『日本の仏教を知る事典』（東京書籍、2005）、編著に『禅といま』（春秋社、2008）他多数。

山崎龍明（やまざき・りゅうみょう）

1943年東京都生まれ。龍谷大学大学院仏教学科真宗学修士課程修了。武蔵野大学大学院教授（仏教学）。浄土真宗本願寺派法善寺住職。著書に『ポケット親鸞の教え』（中経文庫、2009）他多数。

なぜいま「仏教」なのか ――現代仏教のゆくえ

2009年7月20日 第1刷発行

著者©＝奈良康明・山崎龍明

発行者＝神田 明

発行所＝株式会社 春秋社

〒101-0021 東京都千代田区外神田2-18-6

電話 (03)3255-9611（営業）(03)3255-9614（編集）

振替 00180-6-24861

<http://www.shunjusha.co.jp/>

印刷＝株式会社丸井工文社

製本＝株式会社三水舎

装幀＝清水良洋

ISBN978-4-393-10606-8 C0015 Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

はじめに

現代仏教は、今日、さまざまな問題に直面しています。時代や社会の変化に応じて、価値観が多様化しているので、昔の考え方や習慣が、そのままでは通らなくなってきました。それだけに、仏教信仰の理解のしかたや実践に関して、いわば、「古き良き酒を新しい酒袋につめなおす」努力が要請されています。また伝統教団にとつても、ということは僧職にある人にとつても、仏教を説く教化姿勢と現場の乖離が目立ってきています。

今や、そうした現状を分析し、未来への展望を試みておく必要があるのではないのでしょうか。この対談は、しばしば自力対他力という構図で対立的に語られがちな禅と念仏の立場から、現代の現実的な視点に立って、それぞれにうけがっている仏教信仰のあり方を探り、現代社会における仏教の意義を議論しようという趣旨で始められました。

山崎龍明さんは浄土真宗本願寺派に属し、奈良は曹洞宗に属していて、ともに教団の末寺を預かる身です。同時に、仏教研究者としての立場も持ち合わせています。したがって外部から

の仏教教団への批判がそれなりに正当性を持っていることを十分に受けがいつつ、いや、教団内部に在るだけにそうした世俗化現象を身にしみて感じつつも、単なる教団批判に与^{くみ}することはできない。現実には何ほどのことができるかは別として、教団を改善し、より意味ある教団に正していく責務を負っている立場にいます。ですから、基本的には教団を擁護する視点から見えています。しかし、これは決して現状をそのまま肯定し、弁護するということではない。信仰者として、厳しい自戒と現状批判と反省を行いつつも、現代仏教の将来的発展への可能性をなるべく具体的に探ることに主眼をおきたいと思っています。

大きな問題として、仏教信仰と社会の関わりという問題があります(第1章)。仏教は非社会的だとよく非難されますが、どういう意味で非社会的なのでしょう。あるいは、仏教は非社会的ではないのでしょうか。社会的に活動しさえすればいいのでしょうか。仏教には、仏法、つまり真実と向き合うことによって本当の自己を見、はたらかせていくという基本的な姿勢がありますが、自己と向き合う信仰は社会に向かってどう開かれていくべきなのでしょう。か。仏教は慈悲の教えといわれています。その通りですが、今日、あたたかい心が欠けている世の中になっています。また私たちは平和、環境、人権、生命倫理、人倫の荒廃、自殺や引きこもりの問題など、さまざまな社会的な問題にも関わらざるを得ません。

この内なる自己に向かうベクトル(自利)と、外なる社会に向かうベクトル(利他)とはど

う関わってくるのでしょうか。これは、仏教の二本柱である、智慧と慈悲の問題を考えるというテーマでもあり、対談全体の根底を流れる問題です。

次に戒律の問題を論じてみました(第2章)。仏教教団の多くは、出家教団を標榜ひょうぼうしています。しかし、私たちを含め、ほとんどの僧侶が妻帯し、在家的な生活をしています。どうしても現代社会における「出家性」を検討しなくてはなりません、これは、戒律をどう考えるかという問題と直結します。「非僧非俗」を標榜する真宗系教団にとっても関わる大きな問題でありましょう。

同時に戒律は、在家者も含めた仏教的生き方の基礎姿勢を示すものでもあり、今日の社会における倫理道徳のあり方を考える基本的な視点が出せればと考えています。

そして、葬祭の今日的な意義をどう考えるかもまた、きわめて重要な問題です(第3章)。

最近では葬儀と法要をあわせて葬祭と言いますが、ここには民俗信仰的な問題が大きく影響しています。今日の仏教葬祭の意味や意義を考えるには、たとえば、霊魂と仏教の無我説との関係、また一世を風靡ふうびした「千の風になつて」の歌詞を仏教的な観点からどう解釈するかといった問題、位牌やお墓などの問題にも触れざるを得ないでしょう。死者と生者のかかわりという問題です。

そして、最後に第1章で扱った問題をより具体的に現代的な形で整理いたしました(第4

章)。自己探求は仏教の基本ですが、今日においては、仏教の対社会的な役割をどう考えるべきかという問題、またエゴイズムやニヒリズムに対して仏教がどう発言できるかという問題も考えておかなくてはなりません。

この対談では、現代の仏教がどういう問題を、どのように抱えているかを中心に話しあいました。そしてどのように未来を築いていくのか、という問題にも触れました。しかし具体的な教団改革、あるいは政治問題、社会的運動にかかわる具体策を提示したわけではありません。現代の仏教がどのようにあったらいいのか、という基本理念を私たちなりに考え、明らかにしようとしたものです。教団関係者や在家信者の方もさることながら、一般読者の方もこうした問題に関心を持ち、仏教の明るい未来のために、共に考え、力をお貸しいただければ幸いです。

二〇〇九年 五月二二日

奈良康明

なぜいま「仏教」なのか
——現代仏教のゆくえ

目次

第一章 仏教は社会をどうみるのか 1

- ◇自己の探究こそ仏教の本義 4 ◇ただ坐る、ただ念仏する 7
- ◇社会を悲しむ目 10 ◇他者救済による自己の真の救済 14 ◇祖師に学ぶ利他心 17
- ◇社会に無関心な僧侶 20 ◇社会性の根本は慈悲の心 23 ◇自我的自己と自己都合 28
- ◇現実を見据えてこそその仏法 36 ◇生きる力としての仏教 40
- ◇歳月を経て体得されるもの 45

第二章 「出家」とはなにか 49

- ◇出家者の戒律とは 51 ◇親鸞はなぜ妻帯したのか 53 ◇戒と律のちがい 56
- ◇非俗の仏道 60 ◇戒を守る本当の意味 65 ◇頭を剃るより心を剃れ 68
- ◇慈悲の育成こそ修行の本義 71 ◇浄土とはすなわち真実 75
- ◇自力Ⅱ他力 81 ◇善悪の基準 89 ◇造悪論とオウム真理教事件 92

第3章 いのちの大切さを学ぶ 101

- ◇お葬式は「商売」ではない 103
- ◇心の癒しをもたらす葬祭とは 113
- ◇花びらは散っても花は散らない 124
- ◇お釈迦様も認めた民俗信仰 139
- ◇報恩感謝の儀礼 106
- ◇葬儀の仏教的意味 121
- ◇亡き人との対話が生きる力に 134
- ◇なぜ形式化してしまうのか 111
- ◇葬祭のゆくえ 142

第4章 なぜいま「仏教」なのか 147

- ◇仏教の可能性 149
- ◇孤独な自己愛社会 150
- ◇生きがいを喚起する仏教 156
- ◇未来の子供を育てる教育 159
- ◇いのちと平和の大切さ 163
- ◇慈悲心を育てる 172
- ◇これからの寺院の役割 179
- ◇奉仕という生き方へ 185
- ◇ビー玉社会からビーズ玉社会へ 153

おわりに 191

第Ⅰ章

仏教は社会をどうみるのか

奈良 仏教において、「悟り」や「往生」^{おうじょう}は個人の問題ですが、この世に浄土を実現させようというのでもまた私たち教団人に課せられた使命にちがいありません。そうしますと、仏教の教えが社会とどう関わってくるのか、ということは重要な問題として考えておかねければなりません。〈自利〉と〈利他〉の問題といってもいいのですが、こうした仏教と社会の関係について、まず話しあってみたいと思います。

たとえば靖国問題、戦争責任、高齢化社会、人権問題、生命倫理、家庭・学校教育の崩壊など、今の社会は問題が山積みです。そうした現代社会の諸問題に対して、私たち個人としても、また仏教教団としても、どういう姿勢で対応すべきかが問われていると思うのですが、ここでは、そのような基本的な問題を考えてみたいと思います。

山崎 問題は多方面に渡っていますね。戦争の根底には靖国問題がありました。そして、根本にはやはり、いのちの問題があります。

それから、仏教とひとこと言いまして、いろいろな教えを含んでおります。たとえば仏教と社会という問題にしましても、まずここで、仏教というのが何を意味するのかということがあります。

いわゆる仏教そのものを意味するのか、あるいはアジア各地で歴史的に展開されてきた諸宗派を指すのか。それぞれの仏教によってもまた違うと思うんです。先生は、どこにポイントを

置いていらつしやいますか？

※ 自己の探究こそ仏教の本義

奈良 私はまず仏教というものを、その根本の世界観、つまりそれがなかったら仏教にならないという基本の教えから考えていきたいと思っています。仏教というのは、そもそも自己自身に向かい合いつつ生きていく道です。自己を明らめ（諦め）つつ生きる、そこに宗教的な安心^{あんじん}を得ていくのが基本だと。

釈尊も、生老病死に悩んで出家し、修行し、悟りを開いて問題を解決したと言われますが、では生老病死の苦とは何かといったら、結局、何でも思いどおりにしたいという自我の欲望と、思いどおりにはならない現実とのギャップということになります。要するに、これは自我の問題です。

その自我というものにどう向き合っていくのか。自我そのものをも支え、在らしめている真実とはいったい何か。真実のことを仏教では「法」「仏法」などといいます。それが後には、法身仏のように「仏」にもなるわけですが、それに向き合いながら生きていく。どんな社会にいるか、いかなる状況にいるかには関わりなく、真実に向き合って生きていくところに真の自

己実現を目指すのが仏教というもの。ですから、基本的には、特に社会を意識することなく、内なる自己を見つめていく面が強いのは否定できないと思うんです。

そういうところから「仏教は非社会的だ」とよく言われますが、私はこれも一理あると思っている。しかし、私たちは社会に生きていますから、信仰がどう社会と関わってくるのかもまた問われなければなりません。

山崎 その「非社会的」ということでいえば、たとえばキリスト教は非常に社会的であるが、仏教は非社会的だと、昔からよく比較されます。

しかし、そういうことよりもむしろ、「非社会的」なところに一つの価値を見出していたところに、仏教というものの一つの特徴があるのではないのでしょうか。

禅宗で言われる「己事究明^{こじききうめい}」も、所詮は自己から始まって自己に帰るといふ言葉なのでしようけれども、ただ、そういうところを強調し過ぎるあまり、社会というものはどうでもいいんだというように理解されてしまったと言えないでしょうか。仏教者が社会をどう見るかということの整理が案外なされていないようです。

奈良 数年前、バチカン主催「仏教とキリスト教の対話集会」(第3回インド・バンガロール)がありました。対話といっても、かなりアカデミックなものですが、そこに出席していたときのことです。

あるカトリックの学者で神父の方が、「仏教はあまり社会的に活躍していませんね」と発言されました。それは悪口や批判ではなく、軽い意味での提言だったんですが、「またか……」と思いました。「仏教というのは、本当は社会なんかどうでもいいんです。自己と真実に向き合う宗教なんです」と私が発言しますと、さすがにちよつと座がざわめきかかったわけです。

そこで私を応援してくれたのは、スリランカのお坊さんとタイの仏教学者でした。

「それは奈良の言うとおりだ。仏教というものは、あくまでも自我と向き合って悟りを求めていく宗教なので、社会に対して何をするかということとは、在家の信者を指導してやらせればいいのだ」「出家者はひたすら法を追求していくべきで、これが仏教なんだ」という話になって、議論がそちらのほうに流れておしまいになったことがあります。

今日、そういう仏教の本義について、「仏教は社会に対して何もやっていない」「社会性が無い」とよくいわれるものだから、「そうだそうだが、仏教はもつと社会的にならなくちゃいかん」という動きがあります。社会参加型仏教（エンゲージド・ブディズム）などもその一つですが、これは現代の仏教徒にとつてたしかに必要なことだと思います。しかし、社会的運動をしてさえいればいいのか、という疑問を敢えて問うておきたいんです。

これについてどう思われますか。

※ただ坐る、ただ念仏する

山崎 おっしゃるとおりだと思います。難しい問題ですが大切なことです。たしかに、仏教者そのものが、世俗を軽視してきたというような側面もありました。

自己を究明するということは、そういうこととは違うと思うんですが、世俗のことは次元が低いからあまり私たちは関わるべきではないというような発想は、下手な方向に行くと、世俗蔑視みたいなことになってきます。

二〇〇一年、九・一一のテロがありましたとき、その一週間後に私は学生を連れて鶴見の總持寺^{じじ}に参禅に行きました。三〇人の学生を連れて、一泊二日で。学生たちには初めての体験で良かったんですが、せっかくですから雲水さんに講話を頼み、二日間にわたり、二時間以上話をしてもらいました。

学生に「いい機会だから何か質問はありませんか」と言いますと、ちょうどテロがありましたので、ある生徒が「禅僧はテロについてどう考えなんですか」と質問しました。そのとき、その雲水さんが、「われわれはただ坐るだけです、只管^{しかん}打坐^{たざ}です」と言っただけです。当然、生徒たちは騒がしくなるわけです。